

論文番号 254

担当

札幌医科大学 医学部 薬理学講座

題名(原題/訳)

Impulsive traits and 5-HT_{2A} receptor promoter polymorphism in alcohol dependents: possible association but no influence of personality disorders.

アルコール依存症における欲求素因と5-HT_{2A}受容体遺伝子プロモーター部位の多型性: アルコール欲求性に関連する可能性はあるが人格障害には影響しない

執筆者

Preuss UW, Koller G, Bondy B, Bahlmann M, Soyka M

掲載誌(番号又は発行年月日)

Neuropsychobiology 43(3):186-191 (2001)

キーワード

アルコール依存症、セロトニン2A(5-HT_{2A})受容体、遺伝子多型、アルコール欲求行動

要旨

[目的] アルコール依存症患者の(アルコール)欲求行動は患者をより苛酷な依存状態に陥らせる重篤な危険因子であり、セロトニン系神経伝達の障害が関連づけられている。この研究の目的はアルコール依存症者の(アルコール)欲求性と5-HT_{2A}受容体遺伝子プロモーター領域の多型(G1438A)との関連について検討することである。さらに、5-HT_{2A}対立形質、反社会的な人格障害(APD)、アルコール依存症の欲求行動との間の相関関係について検討した。

[方法] DSM-IVのアルコール依存症に適合した135人のドイツ人を対象にした。患者から採血し、5-HT_{2A}プロモーター遺伝子多型を白血球DNAのPCR法で測定した。欲求性の評価はBarratt Impulsive Scaleのドイツ改訂版を基に行った。患者はBarratt scoreを基にして低欲求性と高欲求性のグループに分けられた。APDと境界型人格障害(BPD)はSCID-II面接法を用いて評価した。

[結果] 低欲求性グループは高欲求性グループよりやや年齢が高く、アルコール依存症発症時期が高年齢であった。高欲求性グループのアルコール依存症者は、5-HT_{2A}の遺伝子多型(1438A)頻度と有意に相関していた。分析対象のアルコール依存症者からAPDとBPDを除外してもこの結果は変わらなかった。さらに、5-HT_{2A}の遺伝子多型とAPD、BPDとの相関は認められなかった。

[結論] 本研究の結果から、アルコール依存症入院患者で5-HT_{2A}の遺伝子多型と欲求性素因との有意な関連が初めて示された。一方、人格障害と遺伝子多型との相関はみられなかった。今後、この結果をより多数の対象で検討し、この相関が一般的なものかどうか確立する必要がある。